

初唐詩宴詩における韻の工夫

——初唐王権周辺「宴詩」の韻の状況——

林 宇

一 はじめに

中国古典文学には、一つの「宴」において詠作された作品が多く存在する。それらの「宴詩」は、主催者と参宴者を含めた複数の作者による一種の「共同制作」であり、「宴詩」は一集団の個性を体现していると言える。また、「宴詩」は一集団が同席で詠じ合うため、制作者間の複雑な交流も生じている。それゆえ、「宴詩」は、当時の政治・生活・思想などが豊かに交叉する場であると言える。「宴詩」の研究は、多様性を内に含んだ集団の文学意識を解明することに外ならない。

中国古典文学の「宴詩」は東晋代の「蘭亭の遊」以後、南北朝を経て、唐代に大きく発展した。特に、形式的に整った五言や七言などの律詩、いわゆる近体詩形式が定着した初唐の「宴

詩」には、文学史上重要な参考価値が秘められている。

しかし、現存するほとんどの漢籍は、「宴詩」を収録する場合、「宴詩」として制作機会ごとにまとめるのではなく、内容や作者を優先して分散させている。ごくわずかに『古今歳時雜詠』のような、同一「宴」の「宴詩」を並べるものもあるが、それは、あくまでも「歳時」に基いて選別された後に収録されたものであり、古来の同一「宴」で詠じられた「宴詩」（追和詩を含む）のほとんどが、分散している状況にある。

本論文では、初唐詩が相対的に多く収録されている『全唐詩』^①をもとに、分散収録されている初唐王権周辺「宴詩」を詩宴ごとにまとめる。そして、それらの作品が詠作された本来の「宴」の復元^②を試み、初唐王権周辺「宴詩」にみられる韻の工夫を確認し、その意図を明らかにしたい。

二 唐太宗周辺の「宴詩」における韻の状況

宋の劉攽が著した『中山詩話』⁽³⁾には、次のような一文がある。

唐詩賡和、有次韻、先後無易。有依韻、同在一韻。有用韻、用彼韻不必次。

右の劉攽の見解によれば、唐詩の押韻方法には原作と同じ韻字を用いるだけでなく、使用する位置をもそろえる次韻形式、原作が使用した韻字と同一韻部の他の韻字を使用する依韻、原作と同一韻字を使用するが順にこだわらない用韻とがある。唐太宗周辺の「宴詩」を確認すると、次韻、依韻、用韻の例はほとんど確認されない。一番用韻に近い例としては、次の「春日望海」の「宴」が挙げられる。

春日望海 太宗皇帝

披襟眺滄海、憑軾玩春芳。積流橫地紀、疏派引天潢。
仙氣凝三嶺、和風扇八荒。拂潮雲布色、穿浪日舒光。
照岸花分彩、迷雲雁斷行。懷卑運深広、持滿守靈長。
有形非易測、無源詎可量。洪濤經變野、翠島屢成桑。
之衆思漢帝、碣石想秦皇。霓裳非本意、端拱且圖王。

〔全唐詩〕卷七

奉和聖製春日望海 楊師道

春山臨渤海、征旅輟晨裝。回瞰盧龍塞、斜瞻肅慎鄉。
洪波迴地軸、孤嶼映雲光。落日驚濤上、浮天駭浪長。
仙臺隱螭駕、水府汎鼉梁。碣石朝煙滅、之罘暝雁翔。
北巡非漢后、東幸異秦皇。旆旗羽林客、跋距少年場。
龍擊驅遼水、鵬飛出帶方。將舉青丘繳、安訪白霓裳。

〔全唐詩〕卷三十四

奉和春日望海 許敬宗

韓夷愆奉贄、憑險亂天常。乃神弘廟略、橫海剪吞航。
電野清玄菟、騰笳振白狼。連雲飛巨艦、編石架浮梁。
周游臨大壑、降望極遐荒。桃門通山抃、蓬渚降霓裳。
驚濤含蜃闕、駭浪掩晨光。青丘絢春組、丹谷耀華桑。
長驅七萃卒、成功百戰場。俄且旋戎路、飲至肅嚴廊。

〔全唐詩〕卷三十五

右の三首の韻字のみを比較すると次のような結果となる。

芳、潢、荒、光、行、長、量、桑、皇、王（太宗詩）
裝、鄉、光、長、梁、翔、皇、場、方、裳（楊師道詩）
常、航、狼、梁、荒、裳、光、桑、場、廊（許敬宗詩）

太宗詩と楊師道詩に共通して用いられる韻字は光・長・皇の

三字、太宗詩と許敬宗詩に共通するのは、荒・光・桑の三字、楊師道詩と許敬宗詩が共有するのは、梁・裳・光・場の四字となっている。三首とも用いている共通韻字は光の一字のみである。つまり、太宗周辺の「宴詩」の中で、もつとも用韻に近いものでも、韻字における同調意識はさほど強くなかったと言える。

一方、太宗詩と楊師道詩には、興味深い対句表現がうかがえる。傍線を施した箇所表現が示しているように、太宗詩では「之衆思漢帝、碣石想秦皇。」と漢の皇帝を指す「漢帝」という表現と、秦の始皇帝を指す「秦皇」が対となっている。楊師道詩では、「北巡非漢后、東幸異秦皇。」と太宗詩と字は異なるものの同じく漢の皇帝を指す「漢后」という表現と、太宗詩と完全に一致する始皇帝を表す「秦皇」という表現が対として用いられている。太宗詩と楊師道詩のこの対句上の一致は、明らかに楊師道が太宗詩を意識して表現を寄せたものと思われる。したがって、太宗周辺の「宴詩」において、参宴者が主催者である太宗の作に自作を寄せようとする傾向は、まだ表現上にとどまるものであり、韻字には至っていないことを意味する。

太宗主催の「春日望海」の「宴詩」における参宴者の同調意識は、探字・探韻のような皇帝の指示によるものではなく、自発的なものであったことと言える。それに対し、太宗周辺の「宴詩」には次のような形式のものも確認できる。

両儀殿賦柏梁体（兩京記・貞觀五年、太宗破突厥、宴突利可汗於兩儀殿、賦七言詩柏梁体）。太宗皇帝
絕域降附天下平（帝）、八表無事悅聖情（淮安王）。雲披霧斂天地明（長孫無忌）、登封日觀禪云亭（房玄齡）。太常具札方告成（蕭瑀）。〔全唐詩〕卷一

右の「兩儀殿賦柏梁体」は、貞觀五年（六三一）に太宗が突厥を破り、突利可汗の功を賞して「宴」を催した際の「宴詩」である。この「宴詩」では、詩題注に示されているように、柏梁体を用いるようにと太宗による指示が確認される。

柏梁体とは、『三輔黃圖』『台榭』（卷五）には「柏梁台、武帝元鼎二年春起。此台在長安城中北闕内。三輔旧事云、以香柏為梁也。帝嘗置酒其上、詔群臣和詩、能七言詩者乃得上」と記されるように、漢の武帝が柏梁台を築き群臣を招いて詩宴を催し、上座に七言詩をうまく詠じられた者を座らせたとという故事に由来する。漢の武帝と群臣で詠作された七言詩の連句は最も古い七言詩で、毎句脚韻を踏む七言詩の連句は後に柏梁体と呼ばれるようになった。

このような一人一句かつ脚韻を踏むという精緻な柏梁体の詠作を、突利可汗を宴する場で提唱することの背景には、やはり統治の安定を図ろうとする政治的な意図があったのだろう。現に、初唐の詩に関して前野直彬氏の次のような見解がうかがえる。

太宗の貞観年間（六二七―四九）に見られる學術文化の隆盛は、それらに非常な関心を示した太宗の影響が大きく、その命により、治政の要点を諸書から集めた『群書治要』、『晋書』をはじめとするいくつかの史書、そしてまた『五經正義』など、多くの書物が編纂された。文学史上とりわけ注目に価するのは、隋末唐初から初唐中期にかけて、一種の百科全書ともいふべき『北堂書鈔』『芸文類聚』等の類書、および漢以来の詩文を集めた『文館詞林』などが編纂されたことである。詩壇もまたそのような当時の學術的な風潮を忠実に反映し、前代からの齊梁詩風を依然として繼承しながら、典故や麗辭を多用してそれぞれの学殖をはこつた。

前野氏の指摘によれば、太宗は學術文化を重視することで治世の安定と發展を望んでいたものと思われ、初唐の政治と文学は緊密な關係にあったと言える。その中で柏梁体の応用は、まさに文学を用いた政治活動ともいえるものであったが、韻を意識した唱和を用いて政治の安定を図る傾向は、まだ太宗周辺の「宴詩」に表れていなかったことになる。

三 唐高宗周辺の「宴詩」における韻の状況

高宗の時代になると、太宗の治世より「宴詩」における韻の工夫が明らかになってくる。次の二首は、咸亨四年（六七四）「太

子納妃太平公主出降」を題に収録された一連の「宴詩」の中の二首であるが、計十三首数えられる宴詩の中で、唯一韻の同調を意識した傾向がある二首である。

太子納妃太平公主出降（咸亨四年、太子弘納妃裴氏、有司奏贊用白雁、適苑中獲之。） 高宗皇帝

龍樓光曙景、魯館啓朝扉。艷日濃妝影、低星降婺輝。

玉庭浮瑞色、銀榜藻祥徽。雲軫花榮蓋、霞飄葉綴旒。

（『全唐詩』卷二）

奉和太子納妃太平公主出降三首（別本作一首） 裴守真

瑜珮升青殿、穠華降紫微。還如桃李發、更似鳳皇飛。

金屋真離象、瑤臺起婺徽。綵纓紛碧坐、續羽泛榆衣。

（『全唐詩』卷四十四）

右の高宗の詩は三首の御製中の一首で、裴守真詩はその一首と同じ韻部の韻字を用いている。二首に使用される韻字を比較してみると、共通する韻字は「微」字のみであるが、その配置は同じく三句目の末尾となっている。このように御製の韻字を意識し、さらに共通する韻字の位置を考慮する「宴詩」の在り方は、高宗周辺に至って出現するようになる。前掲前野氏は、高宗と則天武后期の詩歌の發展について、次のように述べている。

新しい王朝の基礎がかたまるにつれ、その勃興する氣運を映して清新な詩歌が現われてきたのは、高宗と、そして主として、則天武后の治世年間であつた。詩の内容的な變貌とともに、この時期は近体詩形式の成長が完了して、中国古典詩の大きな転換期となつたが、さらには高宗の永隆二年（六八一）に、進士科の試験科目にはじめて詩賦がとり入れられたという、重要なことがらを含む。

このように、高宗周辺の「宴詩」に現れた韻字同調の工夫は、詩が重視され、近体詩形式の定着に伴うものであつたと言える。さらに、次の二首からは先に掲げた「奉和太子納妃太平公主出降」の「宴詩」よりも、一歩進んだ韻の同調工夫がうかがえる。

七夕宴懸圃二首（其二） 高宗皇帝

霓裳輶雲路、鳳駕儼天潢。虧星凋夜鬢、殘月落朝璫。

促飲今夕促、長離別後長。輕校聊駐織、掩淚独悲傷。

（『全唐詩』卷二）

奉和七夕宴懸圃應制二首（其二） 許敬宗

婺閨期今夕、蛾輪泛淺潢。迎秋伴暮雨、待暝合神光。

薦寢低雲鬢、呈慙解霓裳。喜中愁漏促、別後怨天長。

（『全唐詩』卷三十五）

右の「七夕宴懸圃」の「宴詩」においては、許敬宗が二番目の自作の韻を高宗の二作目に意図的に寄せており、「潢」字を同じく一句目に配置しているほか、配置は異なるもののさらに共通する「長」字を使用している。また、景龍三年（七〇九）には、「九月九日幸臨渭亭登高得○字」のように探韻形式の詩宴も催され、計二十三首にも及ぶ詠作が行われたほどの規模となっている。これらの詩作の存在は、一つの詠作集団において、韻字を重んじ、一集団の作詩傾向あるいは価値観の同調を図る体制が少なくとも高宗期にはその原型を辿ることができることを意味している。

四 唐中宗周辺の「宴詩」における韻の状況

中宗期に至ると、一詩宴内での韻字の同調方法が一風変わって現れる。

登驪山高頂寓目 中宗皇帝

四郊秦漢國、八水帝王都。闔闔雄里閭、城闕壯規模。

貫渭稱天邑、含岐實奧區。金門披玉館、因此識皇圖。

（紀事云、帝自題序、末云、人題四韻、後罰三杯。日暮、成者五六人、餘皆罰酒。）

（『全唐詩』卷二）

奉和登驪山高頂寓目應制 崔湜

名山何壯哉、玄覽一徘徊。御路穿林輦、旌門倚石開。

煙霞肘後笈、河塞掌中來。不學蓬壺遠、經年猶未迴。

〔全唐詩〕卷五十四

奉和聖製登驪山高頂寓目應制 劉憲

驪阜鎮皇都、鑾遊眺八區。原隰旌門裏、風雲宸座隅。
直城如斗柄、官樹似星榆。從臣詞賦末、濫得上天衢。

〔全唐詩〕卷七十一

奉和聖製登驪山高頂寓目應制 蘇頌

仙蹕御層氛、高高積翠分。巖声中谷應、天語半空聞。
豐樹連黃葉、函關入紫雲。聖恩恢宇鼎、歌賦小橫汾。

〔全唐詩〕卷七十三

奉和登驪山高頂寓目應制 李義

崖巘萬尋懸、居高敞御筵。行戈疑駐日、步輦若登天。
城闕霧中近、関河雲外連。謬陪登岱駕、欣奉濟汾篇。

〔全唐詩〕卷九十二

奉和登驪山高頂寓目應制 武平一

變輿上碧天、翠帟拖晴煙。絕嶠紆仙徑、層巖敞御筵。
雲披丹鳳闕、日下黑龍川。更睹南熏奏、流声入管弦。

〔全唐詩〕卷一〇二

奉和聖製登驪山高頂寓目應制 趙彥昭

皇情遍九垓、御輦駐昭回。路若隨天輶、人疑近日來。
河看大禹鑿、山見巨靈開。願扈登封駕、常持薦壽杯。

〔全唐詩〕卷一〇三

『旧唐書』景龍三年（七〇九）十二月条には、唐中宗が臣下を伴い驪山に行幸した記録が残されている。中宗が驪山を訪れた記述はこの一箇所のみで、おそらく右の一連の詩作もその際中宗が驪山で催した詩宴に因んで詠じられたものである。

具体的に「登驪山高頂寓目」諸作の韻字を見てみると、中宗の御製と三首目の劉憲詩は同一韻部である「上平十虞」の韻字を使用しており、一字「区」が二首に共通して使用されているが位置も異なっている。次に、二首目の崔湜詩と七首目の趙彥昭詩は、同じく「上平十五灰」の韻部に属する韻字を使用し、「開」と「来」の二字が共通して用いられている。さらに、五首目の李義詩と六首目の武平一詩では「下平二仙」が韻部として選ばれ、「筵」が同じく採用されている。面白いことに、二首では韻字のみではなく、それに連なる字句「敞御筵」までが重なる。これは明らかに李義詩と武平一詩の両者間に参照関係があることを意味している。『旧唐書』や『新唐書』のような史書によれば、中宗在位中の景龍年間、李義は中書舍人として、武平一は起居舍人として任官していた。中書舍人は主に詔書の作成を担当する役目で、皇帝の言葉を記録する起居舍人より地位が高

い。ここは武平一詩が意図的に李父詩に韻字を含める字句表現を寄せたと考えるほうが自然である。

このように、驪山で催された中宗主催の詩宴で創作された「登驪山高頂寓目」諸作において、韻字の使用に際して新しい傾向がうかがえるようになった。特別な指示があったかは定かではないが、すべての参宴者が御製に寄せるのではなく、中宗以外の参宴者同士でも韻部が共有される形式が採用されている。無論それぞれで共有される韻字の数も位置も、使用される韻字と位置が完全に一致する次韻とは程遠いものとなっているが、一部の韻字が共有されている点から見れば、互いの韻字を意識していたことは明らかである。また、李父詩と武平一詩で確認できた韻字を含める字句表現の揃え方も、その証の一つである。

右で確認できたような皇帝主催の詩宴で、御製に対してではなく参宴者同士で韻を意識しあう傾向は、別の中宗期の詩宴で詠じられた「立春日遊苑迎春」諸作からも確認できる。

立春日遊苑迎春 中宗皇帝

神皋福地三秦邑、玉臺金闕九仙家。
寒光猶恋甘泉樹、淑景偏臨建始花。
綵蝶黃鸝未歌舞、梅香柳色已矜誇。
迎春正啓流霞席、暫囑曦輪勿遽斜。

奉和立春遊苑迎春心制 閻朝隱

〔『全唐詩』卷二〕

管籥周移寶極裏、乘輿望幸斗城闔。
草根未結青糸縷、蘿薦猶垂綠帟巾。
鵲入巢中言改歲、燕銜書上道宜新。
願得長繩繫取日、光臨天子萬年春。

〔『全唐詩』卷六十九〕

奉和立春遊苑迎春 李適

金輿翠輦迎嘉節、御苑仙宮待獻春。
淑氣初銜梅色淺、条風半拂柳牆新。
天杯慶壽齊南岳、聖藻光輝動北辰。
稍覺披香歌吹近、龍驂日暮下城闔。

〔『全唐詩』卷七十〕

奉和立春遊苑迎春心制 盧藏用

天遊龍輦駐城闔、上苑遲光晚更新。
瑤臺半入黃山路、玉檻傍臨玄霸津。
梅香欲待歌前落、蘭氣先過酒上春。
幸預柏臺稱獻壽、願陪千畝及農晨。

〔『全唐詩』卷九十三〕

「立春日遊苑迎春」を題に含む詩は、『全唐詩』に計七首収録されているが、韻字箇所を四角で示した三首では同一韻部の韻字が用いられており、配置は異なるものの、共に韻字として

「春」・「新」字が韻字として用いられている。御製や他の詩作とはその共通性が確認されず、一詩宴内で御製を除く少なくとも三人の参宴者が互いの韻を意識していたことを意味している。

参宴者同士が韻を意識して共有するという新たな傾向以外に、第二章で触れた「柏梁体」もある程度の発展を遂げたとみられる。

景龍四年正月五日移仗蓬萊宮御大明殿吐蕃騎馬之戲因
重為柏梁体聯句 中宗皇帝

大明御宇臨萬方（帝）、顧慚内政翊陶唐（皇后）。鸞鳴鳳舞向平陽（長寧公主）、秦樓魯館沐恩光（安樂公主）。無心為子輒求郎（太平公主）、雄才七步謝陳王（温王重茂）。当熊讓輦愧前芳（上官昭容）、再司銓筭恩可忘（吏部侍郎崔湜）。文江学海思濟航（著作郎鄭愷）、萬邦考績臣所詳（考功員外郎武平一）。著作不休出中腸（著作郎閻朝隱）、權豪屏跡肅嚴霜（御史大夫竇從之）。鑄鼎開岳造明堂（將作大匠宗晋卿）、玉體由来獻壽觴（吐蕃舍人明悉胤）。○紀事云、時上疑竇從一、宗晋卿素不属文。未即令統。二人固請、許之。吐蕃舍人明悉胤請令授筆、与之。悉胤云云、上大悅、賜与衣服。）（『全唐詩』卷二）

右の内容を確認すると、景龍四年に詠じられた「柏梁体」で

あるこの作では、第二章の太宗期の外交目的に加え、「吐蕃舍人」も創作に加わっていることが注目に値する。嚴寅春氏の論⁹⁾によれば「吐蕃舍人」は吐蕃に赴任した漢人を称したもので、右の「柏梁体」の作者の一人「明悉胤」もそれに該当する。当時、はるか遠方に位置する吐蕃に赴任することは唐人にとってはかなりの困難を伴うことで、その赴任を拒否する漢人が多くいた。その中で、吐蕃と中央を結ぶ「吐蕃舍人」を重んじることは、唐周辺地域の安定を図る唐王朝中央の意識の表れともいえる。現に、史書によれば「明悉胤」は金城公主の出迎えにラサまで赴き、その後幾度も長安とラサを行き来した功労者である。唐王朝と吐蕃の両方から信頼を受ける人物をもてなす行いを、「柏梁体」で実現することは、唐王朝の現実統治における韻の役割の重要さを物語っている。

五 おわりに

本論文では、初唐詩宴詩における韻の工夫に注目し、唐太宗期から唐中宗期に及ぶ様々な詩宴詩を確認してきた。その結果、唐太宗期では御製の韻字の使用状況を重視し、臣下が御製と同じ韻部の韻字を積極的に使用する傾向が存在することが明らかとなった。しかし、その意識は用韻には程遠いもので、韻字の配置にはこだわらない姿勢がうかがえた。

唐高宗の治世では、太宗期の韻字の工夫に加え、御製の韻字の配置を考慮する傾向が表れ、全体的に韻字を用いた統治姿勢

が固まりつつあるような印象を受ける。そして、唐中宗期では韻字の意識はさらに広まり、御製に制限されず参宴する臣下同士で韻字を意識しあうことも可能となった。その証として第四章の「登驪山高頂寓目」を題に含む李义詩と武平一詩にうかがえた、韻字を含む字句の参照が存在する。

さらに、韻字の工夫はこれらの王権周辺の日常的な詩宴のみでなく、外交面での目的を含む場でも確認された。唐太宗期と唐中宗期に詠じられた「柏梁体」の作品では、それぞれ外交使節をもてなし周辺国家との安定を図る目的と、「吐蕃舍人」のような赴任漢人を優遇し、外国との関係の安定を保つ目的とが確認できた。韻字は確実に初唐王権周辺でその統治に貢献していたのである。

紙幅の都合上本論は唐中宗周辺の詩宴詩にとどまったが、今後は引き続き唐玄宗などの周辺やその他の私宴にまで考察を広めていく所存である。

注

(1) 本論文で用いた『全唐詩』の原文は、『全唐詩』（中華書局、一九六〇）による。韻字の判断に関わらない「一作」のような異同は略した。また、一部旧字体を通行字体に私に改め、適宜傍線や太字などを施した。以下同じ。

(2) 同一詩宴の判断に際しては、題に記された「奉和」、「应制」、「侍宴」などのキーワードを手がかりにした。「奉和」は作者より身分

の高い人物の詠作に対し唱和した詩のことで、「应制」は命に应じて作詩したもの、「侍宴」は皇帝主催の宴に侍した際の詩作。

(3) 劉攽『中山詩話』（中華書局、二〇〇四）。

(4) 『三輔黄图』（商務印書館、一九三二）。

(5) 前野直彬『中国文学史』（東京大学出版会、一九七五・三）。P94。

(6) 注(5) 前野氏書。P94。

(7) 『旧唐書』（中華書局、一九七五）。

(8) 紙幅の都合上、韻字上で互いに参照関係が認められない三首、すなわち崔日用詩・馬懷素詩・沈佺期詩は除いた。

(9) 嚴寅春『金城公主入蕃同行人員考』（『中国藏学』、二〇二三・三）。

（りん・う／吉林財經大學大學教員・本學元客員研究員）